

シカゴからの梅干し男

——得体の知れない男——

私の隣に座っていた男は、ちょっと得体が知れなかった。

1995年7月。この年のアメリカは異様な暑さだった。中西部一帯を熱波が襲い、シカゴでは41度近くになった。日射病で倒れる人が続出し、全米では熱波のため400人以上が死んだ。ギラギラと煮えたぎるような真夏の日射しに、皆いらいらしている。強烈な日射しに草も木も人も茹だっていた。

暑さにまいって、人も犬もミシガン湖に押し寄せた。テレビのアナウンサーが叫んでいる。

「ホットマン (hot man) が泳いでいる、何とホットドッグ (hot dog) も泳いでいる！」。

シカゴ市周辺では、30度後半から40度近くの暑さが1週間以上続き、皆が不機嫌だった。そんな時、シカゴ発東京行きのJALのアッパー・デッキ席で、私はその男と隣り合わせた。年齢は50才前後、やや小柄で、ラフなスポーツシャツとデニムのズボン、それにウォーキング・シューズを履いていた。顔はやせぎで、白髪の混ざった短髪。眉間にしわを寄せ、苦虫をかみつぶしたような顔である。

勤め人でないのは一見してわかったが、職業は見当がつかない。旅行慣れしているようだが、定職についているのかどうか。どうも一匹狼の雰囲気である。職業柄、人を見る眼はあるつもりだが、この男は全く読めない。

会釈をしそびれたのは、私が搭乗した時には既に彼は席に座り、スチュワーデス（注。女性客室乗務員の旧称）に文句を言っていたからだった。

オレはJALによく乗るが、こんなことは初めてだ。気分が悪いのに……。

かわいそうに、彼女は平謝りである。

しかし、この男、態度がよくない。何が不満なのか分からぬが、客であることを嵩にきて、頭ごなしにネチネチと言っている。

あんたじや埒があかない。バーサーを呼んでこいよ……。

この男、仕事でストレス漬けになっているのか知らないが、物には言いようがある。まるで事件屋みたいな口のきき方だ。

サービス業も大変だ。接客のプロとはいえ、彼女はまだ若い。年はこの男より二回りも下であろう。他人事ながら私も不快になってきた……。

——巨大ファームとの提携交渉——

長年の友のジムが、新しい法律事務所へ移ったのはその年の5月だった。ジムはかつてニューヨークの法律事務所に勤め、多くの日本の企業を代理していた。

新しい事務所に移ったが、マサ（私のこと）との関係は今まで通り続けたい。今度の事務所は、シカゴとニューヨークで弁護士400人を抱える名門の事務所だ。

われわれのグループが移籍したのを機会に、日本部門を拡充する予定だ。マサの事務所と提携したいので、シニア・パートナー連中に会ってもらいたい。

こんなファックスが入ったのは、ジムが移籍してからまもなくだった。弁護士10人に満たない私の事務所と400人のジムの事務所では、提携というにはおこがましい。だが、ジムのさそいなので、私も気楽にニューヨークに飛んだ。

ところが行ってみると、すぐ甘かった事に気づいた。

ニューヨークの事務所は、パンナムビルの近くの一等地にある。想像以上に豪華なオフィスだった。私は朝から晩まで30分刻みで、シニア・パートナー10人のインタビューを受けることになっていた。やはりアメリカ流だった。「提携話」ともなれば、インタビューは当たり前だろう。たいした準備もなく、ジムの話に飛びついた私が大甘だったのだ。

ジムは朝ちょっと顔を見せ、「後はうまくやれよ」とウインクして、仕事に戻ってしまう。相手は代わる代わるだからよいが、こちらは1人で朝から晩まで英語で悪戦苦闘。まるで30年ぶりの入社試験のようなものだった。

パートナー連中は、日本のことなどほとんど知らない。私とジムとが10数年来の友人だとか、日本の法律事務所は最大でも50～60人の弁護士しかいないとか、日本の弁護士はアメリカの弁護士と比べると幅広い分野を扱っているとか、いつもの通りこんこんと説明しなければならない。その間、あまり通じそうにないジョークを交え、リラックスした態度

で「出来る男」のイメージを与えなければならない。楽ではない。

翌朝、ジムと共にニューヨークからシカゴへ飛んだ。今度はシカゴの本部でのインタビューである。本部はかつてモンデール元駐日大使が勤めていた事務所で、現在もトップは元イリノイ州の知事である。

シカゴのオフィスでも、サンドイッチにコークの食事をはさみながら、朝から晩までインタビューである。

都合がつかかわからなかつたトップのガバナーとも会い、この事務所の対日戦略、対アジア戦略を話し合うことができた。

その後、経営パートナー数名と、提携の条件をつめる。ジムは気楽に「日本で提携事務所の1つでもあればよい」と思ったのかもしれないが、事務所どうしの提携となれば、他のパートナーにとってはそう簡単なことではないだろう。

思いがけなくも真剣勝負の話し合いになったが、結局、われわれの事務所は非独占ベースで提携をすることになった。

——梅干しごときで……—

閑話休題。一仕事やり終えて気分よく乗った帰りの飛行機で、私は「得体の知れない男」と隣り合わせになったのであった。

離陸して水平飛行に入ると、くだんの男は早速パーサーにかみつく。

オレは吐き気がして気分が悪いんだ。こんな時には梅干しが効く。いつも梅干しをもらっているのに、置いてないなんて最悪だ。

パーサーは、^{うるさ}い客とみてか、床に両膝をついて話しかけている。

××様、まことに申し訳ありませんが、御気分がお悪かったらお薬がございますが…。

いや気分はもうおさまった……。だが、梅干しがないとはどういうことなんだ。

梅干しくらい置いておくのが当たり前だろう。客に対するサービスを何と考えているんだ……。

申し訳ありません。今後注意いたします。

何とこの中年男は「梅干しがない」とゴネていたのだ。「いいかげんにしてくれ」。私は腹の中で舌打ちした。

注意すると言ったって、具体的にどうするんだ。実際にどう対処するか、後に報告をしてもらうから。

たかが梅干し一つぐらいで、パーサーを30分以上も説教している。説教の合間には「オレはJALによく乗るんだ」と合いの手を入れる。これをやられては、クルーもたまらないだろう。実に下らん男だ。

——怒りは一時的な狂気である——

この後食事が出て、映画の上映が始まり私も一安心。勿論、こんな男とは話もしない。その後私は眠りについたが、しばらくしてまたこの男の声で目が覚めた。

この男、先ほどのパーサーを呼んで、「どういう対策をとったか」と報告を求めている。「この件を上司に報告したか、その後どういう対策をとったか、とった対策については成田に着くまで文書で提出しろ……」などなど。

数時間もたっているのに、まだネチネチと文句をいう。驚くべき粘着体質！あまりの馬鹿馬鹿しさに、さすがに私も不快になった。「この男、動脈硬化か高血圧か？」と思うものの、私が「まあまあそこらあたりで勘弁してあげたら」などと余計な口出しをしては、かえって揉めるに違いない。

この男の幼なき極まりない。「お客様は神様」だと、嵩にかかっている。

たかが梅干し1個ぐらい笑い飛ばす器量がないと、文句まみれで一生を送る羽目になる。

「怒りは一時的な狂気である」とは、確かセネカの言葉だったはず。そうなら早く鎮めるにこしたことはない。この男、今のところは羽振りがよいらしいが、いずれ大転びするだ

ろう。

成田に着いた時、スチュワーデス、パーサー総出で梅干し男に謝っていた。

JALも常連客と言うことで及び腰すぎる。「お客様は神様」のドグマに縛られる必要はない。へりくだって対応する必要はない。こんな些事でクダを巻くような男には、木で鼻をくくった対応で十分である。

あまりにも日本的な風景に、私は強い違和感をおぼえた。私には「快適な空の旅」からはほど遠いフライトだった。